

The Albert Schweitzer Hospital To-Day

The Albert Schweitzer Hospital has left behind its years of doubts and uncertainty. Since one year a new hospital is being built and never before working and human conditions were as good as they are now. The medical facilities at the hospital are about the same as in an average country hospital in Switzerland, Germany or France, that means a good equipped operating room, modern anesthesia, an X-ray and laboratory department which allows all necessary routine examinations, good nursing care. The monthly medical activities are the following: 1800 outpatient consultations, 120 – 130 surgical procedures, 30 – 35 deliveries, about 200 beds constantly occupied, including 2 surgical, 1 medical, 1 paediatric and 1 maternity ward, a psychiatry and a Tbc station and the leproser. The medical staff includes 4 European doctors, 2 medical students, 12 qualified African and European Nurses, 45 African nursing aids. Since October 1977 a nursing school has been opened, giving the unqualified nursing aids the opportunity to acquire the elementary state diploma of nursing.

What however are the spiritual aims of the Albert Schweitzer Hospital twelve years after the Great Doctor has died ? There are, I think, not many other places in the world where a true cooperation between people of different races and of different social and educational background is possible like in our hospital. All people from abroad are coming for low wages, on a more or less idealistic purpose, to help, to work together with the African brothers. They are mostly young people untouched by colonialistic thinking of the past. A real approach to an equal human base, a real understanding between black and white is made possible here. It is the appreciation of each other, the knowing that not one part is superior to the other but equal in human relationship, that each part can learn from the other, that everybody has a heart to offer to his brother.

Humanity will never exist, where there are masters and servants, where one part is considered as "primitive people" who has first to be educated. Humanity is only possible where man can meet man and work together in mutual appreciation. This kind of cooperation is possible at the Albert Schweitzer Hospital and more than that: it is necessary to-day, where race conflicts are troubling the world. Cooperation on base of humanity is our big challenge and our only possible way into the future.

Dr. Andreas Steiner
Médecin Chef



私にとって「ヨーロッパ」とは何か

社会文化コース4年

大西五己

〈その1〉イメージとしての「ヨーロッパ」

「西洋かぶれ」という言葉は、批判的に用いられるのが常である。しかし、それが何の思想的背景がなかったとしたら、単なる中傷の域にとどまる。広辞苑によれば、「かぶる（気触る）」の意味は①漆または膏薬などの刺激で皮膚に発疹や炎症がおこる。②その風に染まる。感化される。となっている。つまり①が医学的で、②が思想的用法だと言える。「かぶれる」ことは、「かぶれる」もの自身がその存在を消してゆき、一方的に傾倒することであり、「思想かぶれ」はその典型的用法である。しかし医学的に「かぶれる」ことは、この逆であって何かの原因（異質なもの）が人体に接触・侵入することによって矛盾が生じて、炎症が起るのであり、偶然である。言葉はその背後に思想を形成する（背負っている）。「西洋かぶれ」が批判的言葉だとしたら、もう一方の側に「東洋かぶれ」が位置してもおかしくはない。しかし後者の存在を私は耳にしない。それほど「西洋」は異質のものだろうか。異質だからこそ「かぶれ」は生じるのである。ここに文化の異質性の問題が発生する。「西洋かぶれ」の思想的立場（意味）が、羨望の表現であっても、そこにはナショナリズムさえ感じとることができる。他文化に対する接触の仕方は医学的である。炎症をおこすか、スムーズに融合するかどうかである。

西欧に遅れること百年、日本は近代化のために西欧文明を積極的に取り入れてきた。イメージとしての「ヨーロッパ」はこの過程の中で形成されてきたのである。では、そのイメージとしての「ヨーロッパ」とは何か。まず、ヨーロッパが時間的距離的に「遠い国」であることは確かだ。しかし、交通手段、マス・メディアの急速な発達によって、もはやヨーロッパは遠い国ではなくなってきている。明治の先人達が数ヶ月もの日数を要してヨーロッパへ渡ったのに比べ、今日わずか一日で行けるまでになっている。しかし、それでもなお何故「ヨーロッパ」は遠く、「西洋かぶれ」という言葉が存在しつづけるの

か。その理由は、歴史的に形成された「ヨーロッパ」のイメージと、文化的見方に求めることができるのではないか。他文化を自文化より上位と認めると、急速に取り入れられ消化される。一方、下位と認めると無視され蔑視される。西洋文明は先ずその物質文明が上位と認められることによって日本に浸透する。そして続いて文化が。近代化の歴史の中で、永くヨーロッパ文化が上位とみられてきたのは周知のことである。しかし、それが単に積極的にそのようにイメージ化された訳ではない。近代化が上からのそれであったために一般大衆とは無関係のところ、ヨーロッパのイメージが形成されたのではないか。そのイメージが近代化とともに「大衆化」し、単一民族であることと日本文化の偏狭さの故に、「ヨーロッパ」は遠く、羨望の対象になってゆく。そうした歴史的文化的背景を背負って、今日の我々は新たに「ヨーロッパ」をイメージ化する。

多くの日本人が「ヨーロッパ」を見ずして一生を終えるときに、ヨーロッパに行く機会を得たことは幸いであったが、ひとつ残念なことは、自己の内で「ヨーロッパ」とは何かについて明確な位置付けをせずして行ってしまったことである。あらゆるものへの関心が先立って、しかも限られた日数でのあわただしさも手伝って「ヨーロッパ」の意味を確かめずに帰国してしまったのは心残りである。従って、〈その2〉では、日記からの抜粋を中心に現実のヨーロッパへの感想を書きすすめてみたい。

〈その2〉現実としての「ヨーロッパ」

2月26日 10:40 a.m.

とうとう大英博物館にやってきた。今、エジプトコーナーのロゼッタストーンのそばにいる。世界史の教科書に出ていたそれと同じで、1メートル四方程だ。その近くで先ずは休憩した。古代エジプトの彫刻、像、棺等、すべてでかく、本当に本物なのだろうかと思いたくなる。まさに大英帝国の力のシンボルだったと言えよう。

2月27日 4:00 p.m.

科学博物館 (SCIENCE MUSEUM) は実にすばらしい。その方面 (科学・技術) の人なら、この壮大な芸術品を見ずして、ヨーロッパ文明とりわけイギリスの産業革命を語ることはできない。今いるのは3階だが、現代の科学・技術がテーマのようだ。とりわけコンピューターそして PRINTING MACHINE と WRITING MACHINE の発達、2階は鉄の歴史とくに鉄の製造とその利用、例えば農機具と関係づけてヒストリックに語りかける。1階はエンジン、あのワットのスチームエンジンが実物大でみられるのである。アルバート美術館が芸術・美術なら、その隣にあるこの博物館は科学・技術の宝庫だ。しかも無料だし、わずか1、2時間でみるのはもったいない。この近くには自然科学博物館、地質学博物館もあるのだ。4階は南方が空の部門でライト兄弟の飛行機から宇宙空間におけるもの、その手前が電話とアンテナ類、coffee shop でジュースとケーキで一休みして、その下 (3階) に降りると今度は海だ。船の歴史だろう。時計の歴史、自動車、バイク、消防車、例えばバイク、自転車のライトの部分にエンジンをつみ、皮ヒモで前輪を回転させるのである。現代のバイク YAMAHA が展示されている。これまた自転車が面白い。立派(?) なチェーンはついていても、タイヤはなく木製である。

イギリス人ならきつこう言うだろう。おもしろい? 冗談じゃない。すばらしい? いや、すごいと言ってほしいね。実にすごい。これ程のものをそろえ展示しているには、何かの思想がないと無理だ。しかも無料で開放している。世界の中心はイギリスなんだ。今日の文明の先駆者は我々で、今はアメリカが指導的地位にいるが、その基礎は我々がつくったのだ。そういう自信、誇りがこの壮大な資料をみてうかがわれる。ガイドブックには大英博物館は一日ではみられぬとあったが、それ以上にここは時間を要する。我々の現代文明、とりわけ物質文明の基礎とその歴史が詳細に教えてくれるからである。人間の英知と汗まみれの努力がここにあるようだ。目の前にあるこの蒸気機関車をみても、本当にいったいどのように保存し、ここに入れたのか。各種のクラシックカー。ほとんど産業革命以後のものだが、それでも200年前からである。昔のものを大切にするのがイギリス人だそうだが、古いだけではなく、まだまだ先進国である。

3月1日 4:30 p.m.

科学博物館の隣、自然科学博物館に来ている。自

然の動植物を中心にしている。すべて剥製又はミニチュアである。Human bodies のところへ行くと、人体の構造、血液、神経、細胞等詳細に説明され、テレフォンかTVで説明が加えられる。特に「生命の誕生まで」のTVはすばらしい。又、男女の生殖器官及び精子、卵子の説明と結合、分裂の仕方など子供達によくわかるようになっている。RIGHT WINGはホ乳類だ。眼前にはマンモスの牙が展示されている。イギリスをうらやましくおもう。中学生・高校生でここに1ヶ月も通えば自然学者になれるだろう。ここ地質コーナーには、石の全てをみる事ができる。鉱石から隕石に至るまで何千種類の標本が目の前にあり、今左の棚をみると「VOLCANOES」で、HAWAII と Mt. PELEE の構造と石がみれる。大英博物館もいいが、科学博物館と自然史博物館に比べ物知りになる。教科書はいらない。授業で暗記させるより、概説だけ述べて、ここに見物にすればいい。実際この両方の建物にはイギリスの小学生、中学生がよくきている。動物は生きてはいないが、パンダでもラクダ、アメリカンバッファローでも、世界のだいたいのものが、剥製か化石か模型でみることができるとは八割以上本物である。

3月5日 11:10 a.m.

フランクフルトでオペラを見たあと、夜行でミュンヘンに6:30 a.m.につき、今ここドイツ博物館に来ている。形式はロンドンの科学博物館と変わらないが、規模はこっちの方がひとまわり大きいようだ。様々の歴史だ。ここは楽器の歴史、特にオルガン、ピアノ、鉄関係も詳しく展示されている。測量学、化学、物理学、弾道学、熱学、地質学、力学等あらゆる科学・技術の分野に渡って、歴史的に構造的に知ることができる。わずか2~3時間でみるのは実に惜しいことである。ミュンヘンそしてロンドン、パリに一ヶ月以上いれば、ヨーロッパの全ての歴史の発展をかいまみることができるとはなからうかも今ミニパイプオルガンの演奏を、オルガンの歴史の部屋で聴いている。じっくりと、ゆっくりとみたいものだ。

3月7日

高い金を払い、いったいヨーロッパに何を求めてきたのか。ひとつの目的のみでヨーロッパがまわられたら実にいい。しかし、時間と金の制限のある中で学生は多目的であらねばなるまい。多くの学生は無目的だし、プランも厳密ではない。言わば気ままな旅行だ。いかに安く旅行するか。明確にしないまま

にもう10日過ぎた。ひとつの都市については、有名な美術館・博物館等へ行く、オペラに行く。少なくともヨーロッパでのこれらの経験は、日本では体験できない。ただ惜しいのはヨーロッパ各国の歴史を知っとくべきだったし、英語力をつけるべきであった。

はるかなるヨーロッパ

かの文明の源はこの地にありて

今はなき栄華をしのぶ

全ての都市はモダナイズされている。東京もロンドンもオランダもミュンヘンも、ほとんどの人々の形態が共通化してきている。

3月14日 11:00 a.m.

時間を超えて、ふたつの文明が空間を介して存在するのは面白い。ここローマのカラカラ浴場跡はまさに廃跡で、しかしながらそこに人間の情念、情熱を感じられずにはいられない。西洋文明のふたつの源流、古代ギリシャと古代ローマ、今はその面影を残すのみである。とにかくでかい。

3月15日 10:30 a.m.

ナポリ・ポンペイ行きの列車にゆられている。のどかな南イタリアの田園風景が両側に続く。ローマを出てまもなく、ローマ市を防御する壁の跡をみつめる。おそらく古代ローマ時代の防壁であろう。梅(か桃みたいな)の花がきれいだ。アムステルダムからミュンヘンへの風景よりのどかである。実際ドライということ以外実に快適で、さほど寒くもなく、暑すぎることもない。春である。

12:20 p.m. 列車はナポリを出発したが、1時間遅れている。鹿児島を東洋のナポリとはよく言ったものだ。鹿児島市とナポリが姉妹都市であったと、昔きいたことがあるが、結局気候風土とりわけあの桜島とこのベスビオ火山に共通点を見いだせる。従って納得できる。今日はくもり気味で、ベスビオの雄姿ははっきりと見ることはできない。

3月19日

昨日の吹雪がうそのようだ。太陽が照りつつ、山の白い肌が強烈に荒々しく映えている。雰囲気は実にいい。まわりの景色は実によく、絵にかいたようで今にもヨーデルがきこえてきそう。そういえば昨日とはコースがちがうのだ。段々に高いところに登山電車は上っていく。さきほどまで雪はなかったのにもう沿線に雪がつもっている。白い干地と樹木と岩の配色がいい。サングラスをかけているが、太陽は強烈すぎる。グリンデルバルドでやはりユング

フラウを見るべきだと決心して再度ユングフラウへ向った。とうとうアイガー・ユングフラウの雄姿を見ることができた。実にすばらしい。氷河と雪。足下にユングフラウ雪原、大アレッチュ氷河が弧を描く。気圧のせいで頭がフラフラして吐気もあったが、昨日スフィンクスに出たときは吹雪で何も見えなかったが、アイガーや湖、遠くの山々そして下方の大氷河、とうとうあの見たいと思っていた氷河を見れたのである。何とも言えない美しさである。再び来て良かった。夏は外に出られるのだが、冬は雪も深く駄目なようで、しかし立入禁止の扉をあけて外に出ると、これがまた別な角度から氷河が見られて最高である。氷河を見ることがこの旅行の大きな目的であったので2万円出したかいがあったというものだ。

3月20日

ヨーロッパとは何か？私にとってヨーロッパとは？ある意味ではヨーロッパに対峙している。日本人にとってのヨーロッパと言いかえてもいい。まだまだヨーロッパは遠い地球の反対側ということであり、不慣れな一目置いている世界というのが一般的見方のようだ。実際日本の歴史が登場するのは3、4世紀であり、例えばポンペイは2千年以上前だし、エジプトになると紀元前数千年前である。ともかく我々日本人が伝統的なものを有し伝えてきているにもかかわらず、結局過去百年の歴史は、ヨーロッパとの関連なくしては語るができないだろう。少なくとも物質文明の多くを西欧に負っている。我々がいくら古代ギリシアや古代ローマのことについて云々したところで、直接的には関係はない。西欧に遅れること百年、日本の近代化はまず西欧の科学・技術を導入することから始まる。そして文化も。先人達が何ヶ月も船に乗って行ったヨーロッパ。我々にあったのはイメージとしてのヨーロッパであって、現実のヨーロッパではない。勿論そこに何ヶ月間なり数年住んでみなければ勝手にも何も判らないだろうが、旅行者にとってのヨーロッパはさほど驚くことはない。今日のヨーロッパの表面的な姿は、大して日本とかわりはない。但し過去の遺産にはおどろくべきものがあるし、今日の日本のひとつの源が西欧にあると言っても過言ではあるまい。この雄大な風景と日本とは異質なものであるし、トータルに見る必要があるのではないか。とりわけここに住む人々の表情と、他国からのツーリスト。さながら小生は、チロリアンハットをかぶった変な東洋人という

ことなる。新田次郎の「アルプスの谷、アルプスの村」(新潮文庫版)が唯一の読書用の本だ。我がチロリアンハットは、彼によればハンチングということになるだろう。

3月25日 SUNDAY

この旅行でいろいろ感じたことのひとつに、宗教がある。もちろんヨーロッパがキリスト教圏であることの故に、その寺院や美術等の芸術を見のがすわけにはいかない。実に壮大でおびただしい。圧倒されるし、感嘆に値するだろう。しかし、かの中世は暗黒時代と言われ宗教裁判や魔女狩が行われたことは有名だが、それらを示すものはあまり見かけない。ただところどころに残酷な絵画などを見つけることができる。よく展示できるものだ。キリスト自体、手足にクギを打たれ、ヤリで突かれているが、残酷な姿としか言いようがない。実に異様だ。事実、宗教とは異様なものだ。異様な情念や信念なくして壮大な宗教建築などできるわけがない。何故圧巻なのか。思うに、人々に畏怖の念をいだかせるためではないか。子供に教え子とし、あの壮大にして異様な中に身をまかせれば、宗教の力は示され、維持される。まさに力の誇示に他ならない。キリスト教は力と密接に関連している。思うに、宗教は個人に還元されなければならないだろう。徒党を組んだ宗教に余りいいものはない。保守化、時代に反発すると反動化する。あらゆるイデオロギーは個人に還元されなければならない。宗教もしかし。個人の内においてのみ宗教は宗教たりえるのではないか。セクト化し、政治化しては、宗教は教条化され、形式化する。おお、愛と愛することが全ての宗教に先行する!

<その3>再イメージ化された「ヨーロッパ」

再びヨーロッパは遠い世界になってしまった。イメージとしてのヨーロッパではなく、記憶の中のヨーロッパとして。しかし我々のイメージ化されたヨーロッパが、現実のヨーロッパを通過し、交錯して記憶の中に再イメージ化されたことは確かだ。確かにわずか一ヶ月余りの旅行でヨーロッパを見ることはできないし、ましてや語れる自信もない。しかし何の意味を見い出せずして終わってしまったのは、いかにももったいない気がする。イメージとしてのヨーロッパを明確にしなかったことの結果が、実はヨーロッパの位置付けを困難にしていることも否めない

事実である。日々のニュースや本で今日のヨーロッパや過去を知るのはたやすいし、むしろ「現実」はそこにあるのではないかと思う。単に見聞したことは、例えば「東方見聞録」が汗の結晶だとしたら実はそのことは「百聞は一見に如かず」という意味にとどまるものではないということである。つまりその意味において、私自身にとってのヨーロッパであるし、足の痛みをこらえつつ病気になるつつ歩きまわったヨーロッパの再イメージ化にとって重要なのである。では、その再イメージ化されたヨーロッパとは何かというと、結局のところヨーロッパはヨーロッパでしかないということである。我々がいくらヨーロッパ人になろうとしても無駄な努力であるし、日本人のレッテルをはがすことはできない。しかし、それがいつまでも平行線をたどるかということそうではない。時代はパラレルに進行する。東洋と西洋という空間的に遠い世界ではあるが、所詮人間にすぎない。イタリア人はどろぼうが多いとか、イギリス人は紳士的だと言われても、そうした国民性を取り去れば、残るのは生身の人間である。ボラれたり、物をぬすまれたからといって、その国や人々を嫌うのは愚の骨頂である。従ってヨーロッパを羨望の眼差で見るとには賛成できない。いやむしろ彼らの方が抱擁力がある。多くの戦争と支配・被支配を経験してきたヨーロッパ人は、一方では他の地域から歴史的遺産を盗んできたかどで、せめらるべきだとしても実に抱擁力が大きい。悪く言えば東洋人に無関心である。無関心ではあるが、親切である。それに比べ、何と我々日本人は偏狭なことか。もうそろそろ「西洋かぶれ」という言葉はなくなればなるまい。<その1>でかぶれは異質なものと接触で生じるといったが、西洋はかぶれる程に異質ではない。ヨーロッパに幻想はない。あるのは空間をへだててパラレルに生きている同時代の人々である。

補足

本稿は私の「欧州旅行日記」をもとにまとめてみた。<その2>はそのほんの一部にすぎないので、旅行中の様々の出来事や印象等は載せることはできなかった。従って面白くないにちがいない。ついでには御希望の方は原本「欧州旅行日記」を読んでもいただきたい。勿論コピー代実費で…。